

第1章 はじめに

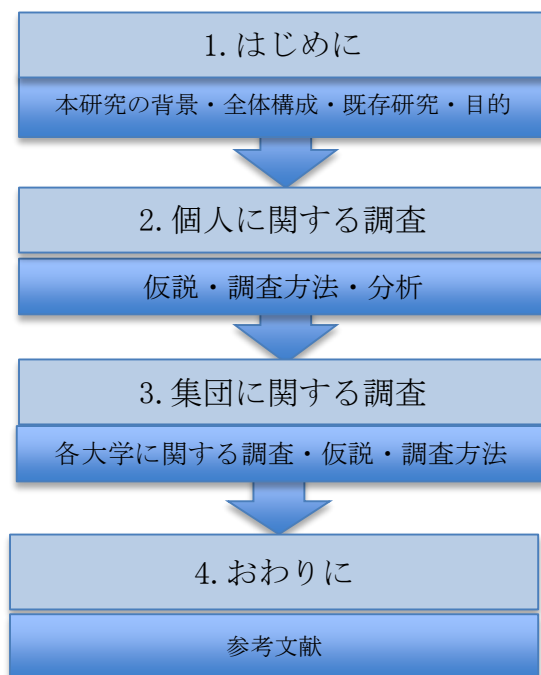
1.1 研究の背景

私たちは常に、その日の自分の予定や行動に合わせて服装を選択する。服装を選択する際、私たちは社会的着装規範¹⁾を考慮する。人前に出るときは整った服装をしなければならないし、目上の人と会合するときには、運動着等といったラフな格好をして行ったら失礼な人と思われるだろう。これらのような規範は公的に定められているものではないが、大多数の人が従っている着装規範である。このように、私たちの被服行動は自分の予定だけではなく、社会的着装規範によっても決定されるのである。

本研究においては、被服行動と社会との関係に着目し、調査することとした。

注1) 社会的着装規範：公的に定められてはいないが、大多数の人が従う着装規範⁸⁾

1.2 全体構成



1.3 既存研究の整理

- ・大学生の服装と景観・授業態度との関連分析—筑波大学の事例—(谷口、2013) ^{※9}
—ジャージやスウェットなど運動着での登校は、学内での景観イメージにネガティブな影響を及ぼし、また授業態度との間にもネガティブな関係が存在する。
- ・着装規範に関する研究 第7報(牛田、高木、神山、阿部、辻、2001) ^{※10}
—着装規範意識は「フォーマル場面での実用性、公正・流行重視」「インフォーマル・セミフォーマル場面での実用性重視」「フォーマル・セミフォーマル場面での社会的調和重視」「セミフォーマル・インフォーマル場面での個性・流行重視」に分類され、規範的着装行動を促し、人々が規範的着装行動を行うことにより、人々がいっそうの肯定的な着装感情を経験できることが示されている。着装行動は、「快—不快」「安心—不安」「誇らしい—恥ずかしい」「優越感—劣等感」の4つの次元で測定している。

1.4 目的

大学に行く場合を考えると、理想としてはある程度しっかりした服装で行かなければならないが、現実としては面倒くさい、今日くらいいいだろう、といっただらしない服で行ってしまうことは少なからず誰しもが経験したことがあるのではないだろうか。こういう考えをみんなが持ってしまうと、既存研究にあるように学内の景観が悪くなるという社会的ジレンマが生じてしまう。そこで私たちはこの理想と現実とのズレが生じることに何が関係しているのかを考え、交通手段に着目した。そこで交通手段による服装の理想と現実の間のズレを個人と集団に分けて調査することを目的とした。

第2章 個人に関する調査

2.1 仮説

・仮説1

この仮説は、自転車、徒歩、クルマ、バス、電車の順に社会的着装規範は高くなるというものである。このような差異が生じる原因として個人の公的自己意識²⁾が関連していると考えられる。他者に見られる要素が強い公共交通である電車、バスは着装規範が高くなると考えられる。特に電車はより人目につくということにより高くなると想定した。また、自転車は他者の目という点以外にも、運動要素を伴う交通手段であ

り、汚れやすい等の要素も含んでいるので、これらを考慮して着装規範が一番低くなると考えた。徒歩は自転車と同等の要素を含むが、運動要素も自転車よりは低いので、この位置とした。クルマは運動を伴うものではないが、公共交通ではないので、徒歩より高く、バスよりは低く設定した。

注 2) 公的自己意識：特に自己の服装や髪型など他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける意識※8

・仮説 2

この仮説は、着装規範と服装許容度 3) のズレは交通手段によって異なり、自転車が最も大きく、徒歩、クルマ、バス、電車の順に小さくなるというものである。大学に行くという同一目的では、服装許容度はある程度高い水準になると考えられる。よって社会的着装規範が高いほど、その服装許容度とのズレが小さくなると考えられる。この仮説 2 は仮説 1 に基づくことで導かれる。

注 3) 服装許容度：その服を着ることができるかどうかの度合い

2.2 調査方法

2.2.1 調査方法、調査場所、サンプル数

私たちは仮説を実証するためにアンケート調査を行うことにした。アンケートの信頼性を確かめるため本調査を行う前にプレ調査を行う 2 段階調査法により調査を行う。調査予定は以下の通りである。

(1) プレアンケート調査

調査対象：交通運輸政策を受講している学生
実施予定日：5/19 (木)
調査方法：質問紙調査
サンプル数：30 人程度

(2) アンケート調査

調査対象：筑波大学、青山学院大学、東京大学
調査方法：質問紙調査
サンプル数：600 人程度 (各大学 200 人程度)

2.2.2 調査項目

私たちはアンケート調査で、以下の 7 項目について調べる。

表 1) 調査項目

(1) 個人属性(祖族、学年、性別)
(2) 学生生活について(自宅通学かどうか、自動車免許の有無、自動車所持の有無、通学時に利用する交通手段、服装に書ける費用と時間について)
(3) 公的自己意識を測る 11 項目(自分が他人にどう思われているか気になる、世間体など気にならない等)
(4) 交通手段ごとの服装許容度(ある服装である交通手段を利用することはできるか)

(5) 目的地固定の服装許容度(大学にある服装で行くことができるか)
(6) 社会的着装規範(大学にある服装で行くことはふさわしいか)

(1) では公的自己意識に影響を与えると私たちが考えた所属、学年、性別についての質問を行う。(2) では生活状況やよく使う交通手段、ファッションへの意識などを聞く。(3) の自己意識を測定する方法としては、「現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について」(岡田 1999) において自己意識の測定法としても採用されている菅原(1984) が邦訳した自己意識尺度のうち、公的自己意識を測定する 11 項目を採用した。(4) でアンケート回答者個人の持つ着装規範を調べ、(5) (6) (7) でアンケート回答者の思う社会的着装規範を調べる。今回調査対象としている 3 つの服装については、いくつか例として写真を添付し、アンケート回答者に服装のイメージをつきやすくしている。

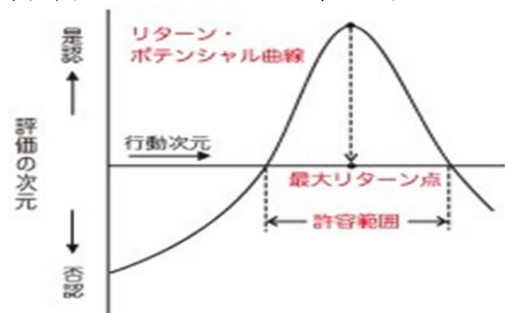
	A) ジャージ やスウェット、運動着など	B) おしゃれな服やピシッと決めた服	C) 普段着 (A、B 以外)
女性 ①			
男性 ①			
女性 ②			
男性 ②			

図 I) 比較的軽装 (スウェットまたはジャージ等)、おしゃれな服やピシッと決めた服、普段着の例

2.3 分析

2.3.1 リターン・ポテンシャルモデル

表 2) リターン・ポテンシャルモデル



仮説 1 を検証するために、リターン・ポテンシャルモデルを使用する。これは特定の行動がある集団の中でどの程度認められるかを示すものである。本研究の場合、横軸に行動次元（ある交通手段に乗るときにある服装をする）を低次元で低位の服装である比較的軽装（スウェットまたはジャージ等）での交通手段の利用、高次元に高位の服装であるおしゃれ着での交通手段の利用を交通手段の低次元順（徒歩、自転車、クルマ、バス、電車の順）に並べモデルを作る。また、このモデルは理想と実情の 2 つの質問ごとに平均値をとってモデルを作成し、比較することによって理想と実情の許容範囲の差を見ることができる。従って、社会的着装規範のジレンマを効果的に表す手段として役立つと推測されるためこの分析方法を使う。

2.3.2 t 検定

また、仮説 1 の検証では、公的自己意識が高いグループと公的自己意識が低い人のグループに分けて、交通手段と被服ごとにその差の平均値を公的自己意識の高いグループと低いグループで別々にとり、2 つのグループで累計 15 回 t 検定を行う。これにより運動着で学校に来ることをふさわしくないと考えているが実際には学校に運動着を着てしまうというジレンマを引き起こしている原因が、公的自己意識であると説明することができると思う。

2.3.3 一元配置分散分析

仮説 2 を検証するために、一元配置分散分析を用いる。一元配置分散分析とは 3 つ以上の母集団についての平均値に有意差があるかどうかを調べる方法である。服装別にデータを 3 つに分け、それぞれのデータについて分析をする。この分析の帰無仮説は「5 つの交通手段の服装許容度と社会的着装規範のズレの平均値に差はない」である。帰無仮説が棄却された場合、服装許容度と社会的着装規範のズレに対する交通手段による効果が有意となる。よって、ズレの平均値の違いは交通手段の違いによるものといえるので、仮説 2 を検証することができる。

第 3 章 集団に関する調査

3.1 各大学に関する調査

第 4 章までは、服装許容度と社会的着装規範との間にズレが生じるか、また、そのズレの度合いが交通手

段によって変わるかを調査した。本章においては、個人の服装許容度と社会的着装規範との間のズレがその個人が属する集団にどのような影響を及ぼすかを調査する。本研究の対象者が大学生であることから、各大学の大学生の服装許容度と社会的着装規範との間のズレの度合いが、その大学のイメージにどのような影響を及ぼすかを調査する。

谷口らの研究より、ジャージやスウェットといった運動着での登校は、学内の景観イメージにネガティブな影響を及ぼすことが明らかにされている。このことから、服装許容度と社会的着装規範との間のズレの度合いが大きいほど、スウェットやジャージ登校が増え、大学のイメージに悪影響を与えられられる。本章では、実際にスウェットやジャージで大学に通っている人が多いのか、また、高校生からの各大学のイメージを調査する。第 4 章までの調査の仮説として、服装許容度と社会的着装規範との間のズレは電車通学が一番小さくなり、次いでバス、クルマ、徒歩、自転車と考えられ、本章での調査の結果、そのズレの度合いが大学のイメージに影響するということが明らかとなれば、服装許容度と社会的着装規範との間のズレを小さくすることが重要となる。すなわち、電車やバスといった公共交通の整備が重要であると言えるのではないだろうか。

3.2 仮説

5.3 で示す写真を用いた実情調査においては、本研究内で調査した各大学の服装許容度と社会的着装規範とのズレが、実際の被服行動として現れると予想される。すなわち、服装許容度と社会的着装規範との間のズレの度合いが大きければ大きいほどジャージ等を着ている人の割合が多いと考えられる。

また、対象者を高校生とした写真を用いた各大学のイメージ調査は、服装許容度と社会的着装規範との間のズレが大きかった大学ほど、大学のイメージに悪影響を与えるということが予想される。すなわち、高校生は、服装許容度と社会的着装規範との間のズレが少ない大学に対して良いイメージを抱き、逆に、服装許容度と社会的着装規範との間のズレが大きい大学に対しては悪いイメージを抱くと考えられる。

3.3 調査方法

学生の服装から想起される大学のイメージを測る為に、同一の状況・環境下、具体的には同等規模の食堂・図書館内、大学正門前において一般学生が写っている写真を撮影する。状況なるべく近づける為に、例えば昼休み中など撮影時間・時期の統一をする。また一枚だけでは偏りが生じてしまう可能性がある為、複数枚(10 枚以上)撮影する。これらの写真を活用した、以下の二つの調査方法で調査を行う。



図Ⅱ) 大学の写真の撮影例

3.3.1 写真を用いた実情調査

一つ目として、それらの写真に写る学生の内、どのくらいの割合の学生が「ジャージ・スウェット・運動着等」(以下ジャージ等とする)を着ているかを調査するものとする。

そして、本研究内で調査した各大学の服装許容度と社会的服装規範の差が、実際にジャージ等を着用している人の数として現れているか比較する。今回、ジャージ等のみを測定する理由として、ジャージ等の服装のみ、客観的に判断可能であるため、また、ジャージ等による登校は大学の景観イメージを損ねることが谷口らの研究により明らかにされているためである。

3.3.2 写真を用いた大学のイメージ調査

二つ目として、それらの写真を、大学名を伏せた上で、どの大学により通いたいかということを高校3年生200人程度にアンケートをとる。これによりその大学の学生生活の視覚的印象という面からの大学へのイメージを調べる。すなわち、視覚的印象が大学そのもののイメージにつながるのかということ进行调查する。ここで、対象者を高校3年生としたのは、大学へのイメージを最も重視するのは大学に進学する高校3年生であると考えたためである。大学のイメージが悪くなると、大学側は多くの受験生を獲得できず、結果的に大学に入学する学生の質も低下してしまうのである。そのため、高校3年生からの大学イメージは大学側にとっても重視すべきものであると考える。

第4章 おわりに

4.1 参考文献

1. 現代若者における自己の身体像と被服 (牛田聡子)
http://ci.nii.ac.jp/els/110000483087.pdf?id=ART0000872025&type=pdf&lang=en&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1461308342&cp=
2. 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について (岡田 努)
<http://ci.nii.ac.jp/naid/110001893179>
3. 自意識尺度日本語版作製の試み (菅原 健介)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy1926/55/3/553_184/_pdf
4. 交通行動が地域愛着に与える影響に関する分析 (萩原 剛、藤井 聡)
https://www.jsce.or.jp/library/open/proc/maglist2/00039/200511_no32/pdf/285.pdf
5. 大学生における服装基準尺度の研究 (松原 詩緒)

http://dspace.bunka.ac.jp/dspace/bitstream/10457/2273/1/001032223_03.pdf

6. 高齢者の服装感情や服装への関心度と日常生活・健康状態との関係 (泉 加代子)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/transjtsj1972/55/4/55_4_P141/_pdf

7. 心理学研究第55巻第3号

http://www.jstage.jst.go.jp/article/jjpsy1926/55/3/553_184/_pdf (菅原 健介)

8. 被服行動と社会心理学-装う人間の心と行動 (神山進)

9. 大学生の服装と景観・授業態度との関連分析—筑波大学の事例— (谷口 綾子)

10. 服装規範に関する研究 第7報 (牛田 聡子、高木 修、神山 進、阿部 久美子、辻 幸恵)

表 2) <http://www.kansatsu.jp/service/kansatsux/column/detail/99>